信濃前司行長？『平家物語』，［-1221?］，1975，市古貞次・校注・訳『平家物語二』（日本古典文学全集 30），小学館。/ Rumi Tani Moratalla & Carlos Rubio 訳，*Heike monogatari*, 2009, Gredos, Madrid.

吉本ばなな『キッチン』，［1988］，1991，福武書店。/ Junichi Matsuura & Lourdes Porta 訳，*Kitchen*, 1991, Tusquets, Barcelona,

作者不詳『伊勢物語』，［平安中期］，1979，阿部俊子・訳注『伊勢物語』，講談社。/ Antonio Cabezas 訳，*Cantares de Ise*, 1979, Hiperión, Madrid. / Jordi Mas López 訳，*Cuentos de Ise*, 2010, Trotta, Madrid.

井原西鶴『男色大鑑』，［1687］．/ Armand de Fluviá 訳，*Historias de amor entre samurais*, 1982, Laertes, Barcelona. / Carlos Rubio & Akiko Imoto 訳，*El gran espejo del amor entre hombres. Historias de samuráis*（巻一～四），2013, Satori, Gijón. / Carlos Rubio & Akiko Imoto 訳，*El gran espejo del amor entre hombres. Historias de actores*（巻五～八），2014, Satori, Gijón.

十返舎一九『東海道五十三次』，［1802］．/ Eva González Rosales 訳，*Viaje por el Tōkaidō. Un rato a pie y otro caminando*, 2014, Quaterni, Madrid.

川端康成『伊豆の踊子』，［1926］，1952，岩波書店。/ Ana María de la Fuente 訳，*Kioto / La danzarina de Izu*, 1975, 1982[5], Plaza & Janes, Barcelona.

川端康成『雪国』，［1935–1937，1947］，1952，1988[40]，岩波書店。/ Armel Guerne 訳，1972, *País de nieve*, Zeus, Barcelona. / César Durán 訳，2003, *País de nieve*, Emecé, Barcelona.

京極夏彦『姑獲鳥の夏』，1994，講談社。/ Isami Romero Hoshino 訳，*El verano de la ubume*, 2014, Quaterni, Madrid.

紫式部『源氏物語』，「若紫の巻」，［1004–1012?］，1970，阿部秋生，秋山虔，今井源衛・校注・訳『源氏物語一』（日本古典文学全集 12），小学館。/ Fernando Gutiérrez 訳，*Romance de Genji*, 1941; 1992, José J. de Olañeta, Palma de Mallorca. / Xavier Roca-Ferrer 訳，*La novela de Genji*, 2005, Destino, Barcelona. / Jordi Fibla 訳，*La historia de Genji*, 2006, Atalanta, Girona. / Hiroko Izumi Shimono & Iván Augusto Pinto Román 訳，*El relato de Genji*, 2013, Asociación Peruano Japonesa, Lima.

大江健三郎『個人的な体験』，［1965］，1981，新潮社。/ Yoonah Kim 訳，*Una cuestión personal*, 1989, Anagrama, Barcelona.

小川洋子『博士の愛した数式』，［2003］，2005，新潮社。/ Yoshiko Sugiyama & Héctor Jiménez Ferrer 訳，*La fórmula preferida del profesor*, 2008, Funambulista, Madrid. / Maite Roig Costa & Yoshiko Sugiyama 訳 , *La fórmula més estimada pel profesor*, 2014, Funambulista, Madrid. / Stephen Snyder 訳，*Housekeeoper + The Professor*, 2009, Harvill Secker, London.

清少納言『枕草子』［c1000］，三巻本，1958，池田亀鑑，岸上慎二，秋山虔・校注『枕草子』（日本古典文学大系 19），岩波書店。/ 清少納言『枕草子』能因本，1974，松尾聰，永井和子・校注・訳『枕草子』（日本古典文学全集 11），小学館。/ Amalia Sato 訳，*El libro de la almohada*, 2001, Adriana Hidalgo, Buenos Aires. / Iván Augusto Pinto Román, Oswaldo Gavilia Cannon & Hiroko Izumi Shimono 訳 , *El libro de la almohada*, 2002, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima. / Jorge Luis Borges & María Kodama 訳，*El libro de la almohada*, 2004, Alianza, Madrid.

島崎藤村「千曲川旅情の歌」（『落梅集』所収），［1901］，1927，『藤村詩抄』，岩波書店。/ Osvaldo Svanascini 訳，“Canto de viaje al río Chikuma”, *Breve antología de la poesía japonesa*, 1984, Fraterna, Buenos Aires.

(i) La ropa era china; / Y de tanto usarla, / Ropa mía es. / Y tú, mujer mía, / ¡Oh, cuán alejada!（衣は唐のもの / そして，それを使用するあまり / わが衣となった / そしてわが妻なるあなたよ / おお，何と遠ざかったことか！）（Cabezas 訳，ibid., p. 44）

(ii) Rico ropaje / gastado por el uso: / tal es mi esposa, / y tan largo el viaje, / que así de ella me aleja.（見事な衣装 / 使用してすり切れた / わが妻も同様だ / そして旅はこんなに長いので / 彼女はこんなに私から遠ざかった）（Mas 訳，ibid., p. 42）

13） また，『源氏物語』中の和歌についての研究書 Silva（2008）や，『紫式部日記』のスペイン語訳もある。

引用文献

近松洋男（2002）「日本最初のイスパニスタ門左衛門」，『ロマンス語研究』35，日本ロマンス語学会，pp. 14–23。

Cid Lucas, Fernando (2012) *Mujeres en la historia del teatro japonés: de Amaterasu a Minako Seki*. Universitat Jaume I, Castelló de la Plana.

Silva, Alberto (2008) *Libro de amor de Murasaki. Poesía de la historia de Genji*, De la Presente, Valencia.

拙稿（2009）「イスパニア語に翻訳された日本文学に関する一考察」，『神戸外大論叢』60(1)，神戸市外国語大学，pp. 65–83。

拙稿（2012）“Sobre la traducción de la literatura japonesa al español”, M^{a}. Jesús Zamora Calvo (ed.) *Japón y España: acercamientos y deencuentros (siglos XVI y XVII)*, Satori, Gijón, pp. 93–110, 322–325.

拙稿（2014）Capítulo 8 “Sobre la traducción de la literatura japonesa al español”, *El español y el japonés*, 神戸市外国語大学，pp. 138–154.

引用作品

近松門左衛門「心中天網島」，［1720］，1976，守隋憲治・訳注『近松世話物集』，旺文社。/ Jaime Fernández 訳，*Los amantes suicidas de Amijima*, 2000, Trotta, Madrid,

東野圭吾『容疑者 X の献身』。2005，文藝春秋。/ Francisco Barberán 訳，*La devoción del sospechoso X*, 2014, Ediciones B, Barcelona.

井原西鶴，『好色一代男』，［1682］，1971，暉峻康隆，東明雅・校注・訳『井原西鶴集一』（日本古典文学全集 38），小学館。/ Antonio Cabezas 訳，*Hombre lascivo y sin linaje*, 1982, Hiperión, Madrid. / Fernando Rodríguez-Izquierdo 訳，*Amores de un vividor*, 1983, Alfaguara, Madrid.

注

1)　この拙い稿を貴誌に発表する機会を与えて下さった愛知県立大学の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

2)　標題は順に *El verano de la ubume, La devoción del sospechoso X, El gran espejo del amor entre hombre, Viaje por el Tōkaido*。

3)　拙稿（2012），同（2014）では，スペイン語圏の読者にむけて同様の主張を行った。

4)　筆者が原案を作成し，Juan Romero Díaz，Roger Civit Contra，生野陽子氏ら，スペイン語母語話者の助言を受けて確定した。ただし誤謬の一切の責任は筆者にある。

5)　たとえば，村上春樹の作品は大半がスペイン語に訳されているが，概して原作の雰囲気を維持し，かつ誤訳が少ない。

6)『ダイヴィング・プール』，『妊娠カレンダー』，『余白の愛』，『やさしい訴え』，『ドミトリー』，『ミーナの冒険』，『凍りついた香り』などがスペイン語に訳されている。『博士の愛した数式』は，英語訳，フランス語訳，イタリア語訳，カタルニア語訳などがある。

7)　なお，同訳書には，「5761455」という電話番号を「5671455」と転記するといった誤りも見られる（原著 p. 13，訳書 p. 18）。些細なことのようだが，これは「1 億までの間に存在する素数の個数に等しい」数だという数学者の発言を導くものであるから，正確でなくてはならない。スペイン語版を元にしたカタルニア語版も同じ誤りを犯している（p. 18）。また，英語版では，“What’s your telephene number?” の後にただちに He nodded, as if deeply impressed. “That’s the total number of primes between one and on hundred million.” という文が続き，具体的な数は略されている（p. 7）。

8)　大江健三郎の作品の中では，他に『飼育』，『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』，『懐かしい年への手紙』，『宙返り』などのスペイン語訳がある。

9)　川端康成については，『伊豆の踊子』の他に，『雪国』，『山の音』，『みずうみ』，『眠れる美女』，『古都』，『美しさと哀しみと』，『千羽鶴』など，また『川端康成・三島由紀夫　往復書簡』までもがスペイン語に訳されている。

10)　また Cid（2012）は，浄瑠璃をはじめとする日本文学における女性の役割を論じている。門左衛門の子孫であられるスペイン語学者による論考，近松（2002）も参照されたい。

11)　井原西鶴の作品では他に，先述の『男色大鑑』や，『好色五人女』，『好色一代女』などが訳されている。

12)　たとえば，折り句「から衣　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　たびをしぞ思ふ」（ibid., p. 52）を，Cabezas は（i）のように，行頭のアルファベットを並べると lylyo（= lilio, カキツバタ）になる詩に訳すという工夫をしている。一方，Mas は（ii）のように，歌の表面上の意味を訳すにとどめ，また折り句についての注釈も付けていないので，読者には原歌の技巧を知ることができない。

が最も難点が少ないので，これに修正を加えた（15f）を本稿の案として提起したい。

4. むすび

本稿で取り上げた誤訳は，大別すると，次のような型に分けられる。

（16）誤訳の型

a. 言語的要因による誤訳：性の義務的標識の有無（『枕草子』，『源氏物語』），数の義務的標識の有無（『好色一代男』，『伊勢物語』）。話法の問題（『伊豆の踊子』，『雪国』），やりもらいの関係･移動の方向（『心中天網島』，『伊勢物語』，『源氏物語』），「ている・てある」の二義性（『枕草子』）。
b. 文化的要因による誤訳：衣服の色彩（『源氏物語』）。
c. 単純な要因による誤訳：訳し漏れ（『個人的な体験』，「千曲川旅情の歌」，『好色一代男』，），数･単位（『博士の愛した数式』，『個人的な体験』，『平家物語』），位置関係（『キッチン』，『平家物語』），構文（『博士の愛した数式』，『個人的な体験』，『伊豆の踊子』）。

（16a），（16b）は十分うなずける要因であり，ある程度やむを得ない点もある。しかも第2節の冒頭で述べたように，現代文学の翻訳においてはこの問題は解消される傾向がある。一方，注目すべきは（16c）の型の単純な誤訳の多さである。本稿では省いたが，固有名詞の表記の間違いもかなり見られる。この問題は，訳出の際，いっそう注意を払い，また原文と訳文とを見比べることで解決できる。せっかく原作の流れを見事に再現した訳文の価値が，単純な誤記で損なわれることは，避けるべきである。今日，日本文学のスペイン語訳の世界においては，新たな作品の訳出だけでなく，すでに著された訳書の再出版もしばしば行われている。今後，その際に誤訳や単純ミスが訂正され，翻訳の改良が進むことを願って擱筆する。

女らの中で最も美しい少女）de unos diez años, en una suave túnica blanca（白い）y un atuendo exterior granate.（外は暗紫色の）Algún día ella será toda una beldad.（Hiroko Izumi Shimono *et al.* 訳，*El relato de Genji*, 2013, vol. I, p. 161）

f. Dos bellas mujeres adultas y algunas muchachas paje entraban y salían（出たり入ったりしていた）de la estancia. Con ellas llegó corriendo una niña de unos diez años, con una vestimenta rosa amarilla（黄色みを帯びたバラ色の）algo arrugada sobre un vestido blanco;（白い）al contrario que las demás niñas,（他の少女たち）era evidente que en el futuro sería una belleza.（筆者案）

『源氏物語』の全訳は2点あり，さらにもう1点，上巻（「篝火」まで）が出版された。他に「葵」までを扱った訳書が1点，「夕顔」のみの訳が2点ある[13)]。本稿では「若紫」の幼い紫の上が登場する場面に関する4つのスペイン語訳を検討しよう。(15a)の(A)「いでいり遊ぶ」，(B)「白き衣」，(C)「山吹」，(D)「見えつる子どもに，似るべうもあらず」は，阿部秋生，秋山虔，今井源衛・校注・訳（1970:280）に従えば，各々「(女の子が）出たり入ったりして遊んでいる」，「白い下着」，「山吹襲（表が薄朽葉，裏が黄色)」，「大勢姿を見せていた子どもたちとは比べものにならない」の意である。

訳文（15b）は，（A）を「走って横切った」と，単一の方向への動作と捉えている。（B）は正しく，（C）もほぼ正しく訳されている。（D）は源氏が，眼前にいる子どもではなく，記憶の中の少女たちと比べているという訳になっている。訳文（15c）は，（A）の部分は，女房たちだけでなく，少女たちも一室にとどまっているという訳になっている。（B）には「青」，（C）には「紫」と，全く異なる訳語が充てられている。（D）は正しく訳されている。訳文（15d）は，（A），（B）を正しく訳出している。（C）「黄色みを帯びたバラ色」も許容範囲と見なせるであろう。しかし(D)には niños という男性形の語が用いられ，男の子たち，または男女の子どもたちを指すことになり，原文の情景に合致しない。最も新しい訳文（15e）は，（A），（B），（C）に関して問題がない。だが，（D）を「外部は暗紫色の」と訳しているのは問題であろう。

このように4点もの労作がありながら，訳の巧みさについての評価を検討する以前に，いずれも基本的な部分で誤りがあるのは惜しいことである。（15d）

という部分を正しく訳せているのは（14d）のみである。（14c）の訳者は結果状態を進行中の動作と誤解している。（14e）は性別を誤っている。（14d）は間違ってはいないが，やや冗長なので，（14d）を元にした（14f）を提案したい。

（15）紫式部『源氏物語』

a. きよげなる大人二人ばかり，さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に，十ばかりにやあらむと見えて，白き衣，山吹などの萎えたる着て，走り来たる女子，あまた見えつる子どもに似るべうもあらず，いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。（紫式部『源氏物語』，「若紫の巻」，［1004–1012?］，1970，p. 280）

b. Dos diestras camareras le servían.
Varias niñas, embebecidas en sus juegos, atravesaron corriendo el aposento.（部屋を走って横切った）Una de ellas, de unos diez años aproximadamente, entró vestida con un traje blanco,（白い）bastante usado, con el forro de color azafrán（サフラン色〈橙色〉）resplandeciente. Genji no había visto jamás una niña parecida.（源氏はこのような少女を見たことがなかった）
—¡Será una criatura maravillosa!（Fernando Gutiérrez 訳，*Romance de Genji*, 1941; 1992, p. 119）

c. Junto a ella había dos damas muy atractivas y unas cuantas niñas que jugaban.（2 人の非常に魅力的な婦人と，遊ぶ数人の少女がいた）Destacaba una muchachita（1 人の少女が際立っていた）de unos diez años vestida con una túnica azul（青い）y un *uchiki* de color púrpura.（紫色）A juzgar por como era ya entonces, prometía convertirse con el paso del tiempo en una belleza espectacular.（Xavier Roca-Ferrer 訳，*La novela de Genji*, 2005, vol. I, p. 177）

d. Dos bellas mujeres adultas y algunas muchachas paje entraban y salían（出たり入ったりしていた）de la estancia. Con ellas llegó corriendo una niña de unos diez años, con una vestimenta rosa amarilla（黄色みを帯びたバラ色の）algo arrugada sobre un vestido blanco;（白い）al contrario que los demás niños,（他の子どもたち）era evidente que en el futuro sería una belleza.（Jordi Fibla 訳，*La historia de Genji*, 2006, vol. I, p. 135）

e. Junto a ella había dos atractivas mujeres, y niñas pequeñas que jugando entraban y salían.（遊びながら出たり入ったりしていた）La más bonita de ellas,（彼

る」という動詞を用いているので，この問題から免れている。しかし「たつた山」の序詞や掛け言葉を忠実に表現しようとして，やや意味が伝わりにくい訳になった。本稿では，（13c）に手を加えた（13d）を提案する。

（14）清少納言　同

a. 頭はあまそぎなるちごの，目に髪のおほへるをかきはやらで，うちかたぶきて物など見たるも，うつくし。（清少納言『枕草子』三巻本，第百五十一段，［c1000］，1958，p. 206）

b. 尼にそぎたるちごの，目に髪のおほひたるを，かきはやらで，うちかたぶきて物など見る，いとうつくし。（清少納言『枕草子』能因本，第百五十五段，［c1000］，1974，p. 298）

c. Una niña a la que están cortando los cabellos（散髪をしてもらいつつある）como a una monja, de manera que los ojos quedan cubiertos, despeja su cara sin usar las manos, inclinando su cabeza a un costado pues quiere ver algo. Realmente encantador.（Amalia Sato 訳，*El libro de la almohada*, 2001, p. 204）

d. Una niña, cuyo cabello ha sido cortado（散髪された）como el de una monja, intenta inclinarse a mirar alguna cosa, mas se ve impedida por el pelo que le cae sobre los ojos, y en lugar de apartarlo con la mano ladea una y otra vez la cabeza. ¡Qué cuadro encantador!（Iván Augusto Pinto Román *et al.* 訳，*El libro de la almohada*, 2002, pp. 300–301）

e. Un niño（男の子）cuyo cabello ha sido cortado（散髪された）como el de una monja, revisa algo. El cabello le cae sobre los ojos. En lugar de apartarlo, pone la cabeza de lado.（Jorge Luis Borges *et al.* 訳，*El libro de la almohada*, 2004, pp. 85–86）

f. Una niña（少女）a la que han cortado los cabellos（散髪された）como a una monja, de manera que los ojos quedan cubiertos, despeja su cara sin usar las manos, inclinando su cabeza a un costado pues quiere ver algo. Realmente encantador.（筆者案）

『枕草子』には，抄訳だが3種類のスペイン語訳がある。このうち，「うつくしきもの」の段の中の（14a，b）「尼そぎという髪型をしている幼女が，目に髪がかぶさるのをかきのけず，顔を傾けて物を見るのは，とてもかわいらしい」

まえに）pregunto: / La que yo bien quiero / ¿está bien, o mal?（Antonio Cabezas 訳，*Cantares de Ise*, 1979, p. 47）

c. Si en verdad eres / pájaro de la capital,（おまえが都の鳥〈単数形〉なら）/ ten（おまえ，～せよ）a bien responderme: / ¿está viva, o ha muerto, / la persona en quien pienso?（Jordi Mas López 訳，*Cuentos de Ise*, 2010, pp. 43–44）

d. Ya que sois gaviotas / de la Capital,（おまえたちが都カモメなら）/ yo os（おまえたちに）pregunto: / La que yo bien quiero / ¿está bien, o mal?（筆者案）

『伊勢物語』にも２つのスペイン語訳が存在する。早く出た Cabezas 訳の方が，後から出た Mas 訳よりも優れている箇所が多い[12]。しかし（12a）に関しては，（12c）だけでなく（12b）にも問題がある。両者では，都鳥を１羽と見なしているが，この和歌を題材にした絵画，彫刻では，一般に，何羽もの水鳥が描かれていることから明らかなように，伝統的に，この情景の鳥は複数と捉えるのが通例である。（12b）を元に，動詞，人称代名詞にも手を加えて作った訳（12d）を提案する。

（13）『伊勢物語』

a. 風吹けば　沖つ白波　たつた山　夜半にや君が　ひとりこゆらむ（『伊勢物語』第二十三段，ibid., p. 112）

b. La tormenta brama. / Las olas se encrespan. / Cresta Dragón / cruzarás（あなたは越えているだろう）de noche / sin tu compañera.（Antonio Cabezas 訳，ibid., p. 63）

c. ¿Vendrás（あなたは来るのだろうか）tu *[sic]* solo / por el monte Tatsuta / en esta noche oscura / de caminos arteros / como un mar proceloso?（Jordi Mas López 訳，ibid., p. 62）

d. ¿Irás tú（あなたは行くのだろうか）solo / por el monte Tatsuta / en esta noche oscura / de caminos arteros / como un mar proceloso?（筆者案）

「筒井筒」の段の後半に登場する和歌（13a）は，河内の女のもとに向かう夫の身を案じる大和の女の作であるから，「こゆらむ」を（13c）のように，「作者の方に向かう移動」と解釈しては，意味が成り立たない。（13b）は「越え

(11)『平家物語』

a. 「三十丈の谷, 十五丈の岩さきなゝど申す所は, 人のかよふべき様候はず。(…)」「世間だにもあたたかになり候へば，草のふかいにふさうどて，播磨の鹿は丹波へこえ，世間だにさむうなり候へば，雪のあさりにはまんとて，丹波の鹿は播磨の印南野へかよひ候」(信濃前司行長？『平家物語』,「老馬」, [-1221?], 1975, p. 220)

b. —No hay hombre capaz de bajar a un valle por una pendiente de treinta *shaku*（30 尺）y con peñas de hasta quince de altas.（…）
—Cuando viene el buen tiempo, los ciervos de Harima cruzan Tamba（丹波を越え）en busca de pastos verdes. Cuando se acaba del buen tiempo, regresan de Harima（播磨から）a buscar comida en llanuras donde haya poca nieve.（Rumi Tani Moratalla *et al.* 訳, *Heike monogatari*, 2009, pp. 606–607）

c. —No hay hombre capaz de bajar a un valle por una pendiente de treinta *jo*（30 丈）y con peñas de hasta quince de altas.（…）
—Cuando viene el buen tiempo, los ciervos de Harima cruzan esta montaña hacia Tamba（丹波に向かってこの山を越え）en busca de pastos verdes. Cuando se acaba del buen tiempo, regresan a Harima（播磨に）a buscar comida en llanuras donde haya poca nieve.（筆者案）

『平家物語』のスペイン語訳にも時に誤謬が見られる。(11a) の「30 丈」(約 91m) が (11b) では「30 尺」(約 9.1m) と転記され，鵯越の絶壁には物足りない高さになっている。また,「鹿が播磨で越冬し，春以降は丹波で過ごす」とあるべきところ，移動の方向が逆に示されている。こういった些細な誤りも繰り返されると，せっかくの労作の価値を損なう危険性があるので，(11c) のように修正することを提案する。

(12)『伊勢物語』

a. 名にし負はば　いざこととはむ　都鳥　わが思ふ人は　ありやなしやと（作者不詳『伊勢物語』，第九段，［平安中期］，1979，p. 53）

b. Ya que eres gaviota / de la Capital,（おまえは都カモメ〈単数形〉だ）/ yo te（お

codorniz asada（1 羽の焼いた鶉に金 18 オンス）, para que se la tomara como tapa una daifa; pero este banquete ha sido una gran sorpresa, tan exótico y tan delicioso.（〈料理は〉異国情緒あふれ，美味だ）（Antonio Cabezas 訳，*Hombre lascivo y sin linaje*, 1982, p. 197）

c. Yonosuke se mostró favorablemente impresionado:
—Yo recuerdo haber pagado en Kyoto treinta y cinco “ryoo” por un banquete de codornices asadas（焼いた鶉〈複数〉の宴会に35両）en honor de una cortesana; pero con todo y con eso no he podido menos de admirarme ante este convite. Y además me agrada mucho ver que aquí las mujeres han adoptado aires nuevos.（ここでは女性たちが新しい雰囲気を採り入れているのを見て，私はとてもうれしい）（Fernando Rodríguez-Izquierdo 訳，*Amores de un vividor*, 1983, pp. 294–295）

d. —Una vez —ponderó este— pagué en Kioto dieciocho onzas de oro por una cororniz asada,（1 羽の焼いた鶉に金 18 オンス）para que se la tomara como tapa una daifa; pero este banquete ha sido una gran sorpresa. Y además me agrada mucho ver que aquí las mujeres son exóticas y sumisas.（ここでは女性たちが異国情緒あふれ，従順なのを見て，私はとてもうれしい）（筆者訳）

『好色一代男』は 2 種類のスペイン語訳が公刊されている[11)]。日本語では数を表示する形態素の使用が義務的でないことが，しばしば非母語話者の誤解の原因となるが，（10a）の「鶉」についてもその問題が見られる。訳文（10b）はこれを単数と捉え，（10c）は複数と見なしている。暉峻・他校注・訳（1971：299）によれば「江戸時代には鶉の鳴き声を賞美して競い合い，名鳥は 20 両，30 両で売買したことが諸書に見える」とのことだから，ここは 1 羽の価格についての言及と考えて間違いないだろう。また，「風俗も替わりてしをらし」という句は，（10b）では訳されておらず，（10c）では，やや異なった内容になっている。この句は，その後に続く，各地の廓の衣装を着せた人形展示への導入となっているので，正確に訳すことが望ましい。（10b）に手を加えた（10d）を代案として提出する。

ぶり振り。「いやいやたったいまお宮で蜜柑を二つづゝくらはせ。わしも五つくらうた」と。阿呆のくせに軽口だて苦笑するばかりなり。（近松門左衛門「心中天網島」中の巻，［1720］，1976，p. 164）

b. OSAN: Tama, dale a ese tonto una buena tunda de palos; dásela para que se acuerde toda la vida.

SANGORŌ: No, no, que no me den nada. Yo ya les di a los niños las mandarinas en el templo, y yo me di el gusto de comerme cinco.（私はすでに子どもたちに蜜柑を与えた。そして自分でも５つ食べた）

NARRADOR: Aun siendo tan tonto, le salen con facilidad los chistes malos, y a los demás no les queda otro remedio que reír, aunque con una mueca de disgusto.（Jaime Fernández 訳，*Los amantes suicidas de Amijima*, 2000, p. 85）

c. SANGORŌ: (...) En el templo dieron dos mandarinas a cada niño pero yo pedí cinco, y yo me di el gusto de comérmelos.（蜜柑を子どもたちに２個ずつ配ったが，私は５つねだり，それらを全部食べてしまった）（...）（筆者案）

ここには，「食らわす」が，「食べさせる」と「懲らしめる」という二義を持つことを利用した言葉遊びが見られ，翻訳が困難な箇所である。（9b）では，dar（与える）という動詞を，基本語義の他に，dar tunda（めった打ちを食らわせる），dar gusto de（～という喜びを与える ＞ ～してやる）のような熟語としても用い，巧みにしゃれを再現している。しかし（9a）で「大阪天満宮では，子ども１人につき２個ずつ蜜柑を無料で配って食べさせた。三五郎は，もう子どもと言える年齢ではないのに，ずうずうしくも５個もらった」とあるところを，訳文（9b）では「三五郎が子どもたちに蜜柑を与えた」と，全く異なる内容になっている。(9b)の訳者の工夫を生かしつつ原文に沿わせるべく，(9c)を提案したい。

（10）井原西鶴『好色一代男』

a.「我京にて三十五両の鶉を焼鳥にして太夫の肴にせし事も，今この酒宴におどろき，風俗も替わりてしをらし」と誉むれば（…）。（井原西鶴，『好色一代男』，巻八「都の姿人形」，［1682］，1971，p. 299）

b. ―Una vez ―ponderó éste― pagué en Kioto dieciocho onzas de oro por una

(8) 島崎藤村「千曲川旅情の歌」

a. 小諸なる古城のほとり　　雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩蔞は萌えず　　若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺　　日に溶けて淡雪流る（以下略）
（島崎藤村「千曲川旅情の歌」〈『落梅集』所収〉，［1901］，1927，『藤村詩抄』，pp. 168–169）

b. Cerca de la antigua casona, en Komoro,
Las nubes son blancas, el viajero melancólico.
（1 行欠）
Al pie de la colina ataviada de plata
La fundida nieve se ensombrece bajo el sol...（...）
（Osvaldo Svanascini 訳，“Canto de viaje al río Chikuma”, *Breve antología de la poesía japonesa*, 1984, p. 99）

c. (...) / El verde de las pamplinas aún no ha brotado, ni tampoco hay hierbas tiernas suficientes para sentarme.（はこべの緑はまだ萌えださず，私が座るに十分な柔らかい草も生えていない。）/（...）（筆者案）

島崎藤村の作品では，『破戒』などが訳されている。(8a) で始まる「千曲川のスケッチ」もスペイン語訳があるが，(8b) のように人口に膾炙した句の訳し漏れがあるのが惜しまれる。(8c) のような訳を充てれば，少なくとも元の詩の表現内容は伝えられる。

3. 古典文学

続いて，明治時代より前に書かれた文学作品を検討しよう。人形浄瑠璃では，近松門左衛門の『心中天網島』，『曽根崎心中』など世話物が訳されている[10)]。

(9) 近松門左衛門『心中天網島』

a.「これ玉。其の阿呆め覚える程くらはしゃくらはしゃ」と。いへば三五郎か

detuvo ante mí, con los pies separados, ansioso de diversión, y me dijo:
—¿Sí? ¿Sí?
Y yo grité:（そして私は叫んだ）
—¡Vamos a pasar la noche en vela! ¡Jugando, jugando!
Yo（私は）tenía ganas de pelea.（Ana María de la Fuente 訳，ibid., p. 296）

c. (...) Y siguió muy animado:（そして彼は勇み立って言った）
—¡Vamos a pasar la noche en vela! ¡Jugando, jugando!
Yo también（私も）tenía ganas de pelea.（筆者案）

この場面では，訳者は「今夜は徹夜ですぞ。～」を主人公の発言と取った結果，「私もまた」という句が意味を持たなくなるので，「私は」に改めて訳している。（6b）に代え，（6c）を提案する。

(7) 川端康成『雪国』

a. 娘は窓いっぱいに乗り出して，遠くへ叫ぶように，
「駅長さあん，駅長さあん。」（川端康成『雪国』，［1935–1937，1947］，1952，1988[40]，p. 5）

b. Asomándose tanto como le era posible, la muchacha llamó al guardagujas *[sic]*（駅長を呼んだ）a voz en gritos, como quien se dirige a una persona muy alejada.（Armel Guerne 訳，1972, *País de nieve*, p. 13）

c. Asomándose al máximo, la muchacha llamó al guardaagujas（駅長を呼んだ）a voz en grito, como quien se dirige a una persona lejana.（César Durán 訳，2003, *País de nieve*, p. 15）

d. Asomándose tanto como le era posible, la muchacha llamó al guardaagujas a voz en gritos, como quien se dirige a una persona muy alejada:
—¡Jefeee! ¡Jefeee!（駅長さあん，駅長さあん！）（筆者案）

『雪国』には２つのスペイン語訳がある。冒頭の（7a）は，（7b），（7c）とも間接話法で訳されている。誤訳ではないが，この呼び声の主，葉子は，悲しいほど美しい声が特徴であり，このときの声がのちに回想される重要な役割を担っているから，ここは直接話法を用いるのが適切かと判断し，（7d）を提案する。

ibid., pp. 295–296）

c. Las tres muchachas se acercaron entonces al tablero de go y el joven dijo al jefe del grupo:（若者は座長に言った）
—¿Vais（あなたがたは～する）a salir otra vez esta noche?（A）
Él（彼［座長］は）se quedó pensativo un momento y luego respondió:
—Hum..., ¿qué hacemos? Creo que será mejor que por hoy lo dejemos ya y descansemos un poco.（B）
—¡Oh, qué bien, qué bien! ¡Maravilloso!（C）
—Pero, ¿no os reñirá vuestra madre?（あなたがたのお母さんはあなたがたを叱りはしませんか）（A）
—¡Bah! De todos modos, no hay clientes.（B）（筆者案）

日本語の直接話法では，敬語や終助詞などの手掛かりによって，話し手が誰であるか判断できることが多いので，「～と…が言った」という伝達部はしばしば省略される。（5a）には厳密な意味での伝達部がないが，各発話部の話し手が同定できる。しかしそのような手掛かりがあまり発達していない西洋語の母語話者にとっては，この判断が困難で，時に誤りを犯す。（5b）では，話し手（A）～（C）を取り違えたため，会話が成り立っていない。代案として（5c）を提出する。

（6）川端康成『伊豆の踊子』

a. 踊子が帰った後は，とても眠れそうもなく頭が冴え冴えしているので，私は廊下に出て呼んでみた。
「紙屋さん，紙屋さん。」
「よう……。」と，六十近い爺さんが部屋から飛び出し，勇み立って言った。
「今夜は徹夜ですぞ。打ち明かすんですぞ。」
私もまた非常に好戦的な気持だった。（川端康成，ibid., p. 80）

b. Cuando, por fin, las muchachas se despidieron y me acosté, el sueño no quería acudir. Mi cabeza estaba despierta, muy despierta. Salí al corredor y grité:
—¡Señor papelero! ¡Señor papelero!
El hombre, que tendría casi sesenta años, salió de un brinco de su habitación. Se

al fin un antiguo anhelo.（以前からの願いをついに叶えることができた喜ばしい感情に励まされて）（Ana María de la Fuente 訳，*Kioto / La danzarina de Izu*, 1975, 1982[5], pp. 279–280）

c. Estaba maravillado por el esplendoroso colorido que el otoño había extendido sobre las montañas, los solitarios bosques y los profundos valles de los manantiales. Caminaba animado con el corazón puesto en una esperanza.（胸に期待に抱いて）（筆者案）

川端康成の作品の翻訳にも誤訳が認められる[9)]。たとえば原文（4a）の「一つの期待に胸をときめかして」は，「踊子たちの一座に再会できるのではないかという期待を持って」の意味であるが，スペイン語訳（4b）では希望がすでに実現したことになっている。（4c）のように修正されるべきであろう。

(5) 川端康成『伊豆の踊子』

a. 娘たちが碁盤の近くへ出て来た。
「今夜はまだこれからどこかへ廻るんですか。」（A）
「廻るんですが。」（B）と男は娘たちの方を見た。
「どうしよう。今夜はもう止しにして遊ばせていただくか。」（B）
「嬉しいね。嬉しいね。」（C）
「叱られやしませんか。」（A）
「なあに，それに歩いたってどうせお客がないんです。」（B）（川端康成，ibid., pp. 79–80。記号（A）～（C）は筆者による。以下同じ）

b. Las tres muchachas se acercaron entonces al tablero de go y una de ellas dijo al joven:（彼女たちの１人が若者に言った）
—¿Vamos（私たちは～する）a salir otra vez esta noche?（C）
Él（彼［若者］は）se quedó pensativo un momento y luego respondió:
—Hum..., ¿qué hacemos? Creo que será mejor que por hoy lo dejemos ya y descansemos un poco.（A）
—¡Oh, qué bien, qué bien! ¡Maravilloso!（C）
—Pero, ¿no nos reñirá nuestra madre?（私たちの母が私たちを叱らないだろうか）（B）
—¡Bah! De todos modos, no hay clientes.（C）（Ana María de la Fuente 訳，

パートのキッチンに座って，暗い中で音楽を聴きウイスキーを飲んでいた）（Yoonah Kim 訳，*Una cuestión personal*, 1989, p. 13）

c. Bird se casó en mayo, a la edad de veinticinco años, y durante ese primer verano permaneció borracho de *whisky*（または*güisqui*）（ウイスキーを飲んで酔っていた）cuatro semanas seguidas. De pronto, como un Robinson Crusoe embrutecido, había comenzado a ir a la deriva por un mar de alcohol. Descuidó sus obligaciones como licenciado, su trabajo, sus estudios de posgrado. Lo abandonó todo sin pensar, y pasaba el tiempo en el salón con cocina americana a oscuras sin hacer otra cosa que beber *whisky* escuchando música, no solo a altas horas de la noche sino también en el pleno día.（暗くしたアメリカ式キッチンで時を過ごし，深夜だけでなく真昼も，音楽を聴きながらウイスキーを飲むこと以外は何もしなかった。）（筆者案）

原文 (3a) の「ウイスキー」が訳文 (3b) では略されている。小説の舞台となった 1960 年代初めの日本で，ウイスキーで泥酔するのは一般的とは言えないであろう。このアルコール飲料は主人公の造形につながる手掛かりであり，省かずに訳すことが望ましい。それに続く描写では，「日中の飲酒は慎むべきである」という日本の常識を踏まえて「深夜はなおのこと，真昼のあいだも」という表現が使われているが，訳文では「日中ずっと，そして深夜までさえ」と，ことの軽重が逆になっている。また「リヴィング・キッチン」が単なる台所と訳されているので，訳書でこの作品を鑑賞する読者は，原作とはかなり異なる情景を思い描くことになる。以上のような危険を避けるため，訳文（3c）を提案する。

(4) 川端康成『伊豆の踊子』

a. 重なり合った山々や原生林や深い渓谷の秋に見惚れながらも，私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。（川端康成『伊豆の踊子』，［1926］，1952，p. 64）

b. Estaba maravillado por el esplendoroso colorido que el otoño había extendido sobre las montañas, los solitarios bosques y los profundos valles de los manantiales. Caminaba animado por el delicioso sentimiento de haber satisfecho

花だらけだった。（吉本ばなな『キッチン』，［1988］，1991，pp. 13–14）

b. A través de un gran ventanal se veía la terraza,（大きな窓のむこうにベランダが見えた。そこには）tan llena de plantas, en macetas y jardineras, que parecía una jungla.（Junichi Matsuura *et al.* 訳，*Kitchen*, 1991, p. 18）

c. Delante de un gran ventanal que daba a la terraza,（ベランダに面した大きな窓の手前には）había muchas plantas, en macetas y jardineras, que parecía una jungla.（筆者案）

吉本ばななの作品では，『キッチン』の他，『白河夜船』，『TUGUMI』，『N・P』，『アムリタ』などがスペイン語に訳されている。『キッチン』はスペイン語で読んでも原作の趣きがよく伝わる優れた訳だが，時に誤りもある。（2a）では室内にあるはずの観葉植物が，（2b）ではベランダに置かれていることになる。この箇所を（2c）に代えることを提案する。

続いてノーベル賞作家の作品の翻訳の検討に移ろう。大江健三郎の『個人的な体験』の次の部分は，正確に訳されているだろうか[8)]。

（3）大江健三郎『個人的な体験』

a. 鳥（バード）は二十五歳の五月に結婚したが，その夏，四週間のあいだ，ウイスキーを飲みつづけた。突然かれは，アルコールの海を漂流しはじめたのだ。かれは泥酔したロビンソン・クルーソーだった。鳥は大学院学生としてのすべての義務を放擲し，アルバイトもかれ自身の勉強も，なにもかも捨ててかえりみず，深夜はなおのこと真昼のあいだも，暗くしたリヴィング・キッチンでレコードを聴きながら，ただウイスキーを飲んでいた。（大江健三郎『個人的な体験』，［1965］，1981，p. 12）

b. Bird se casó en mayo, a la edad de veinticinco años, y durante ese primer verano permaneció borracho（酔っていた）cuatro semanas seguidas. De pronto, como un Robinson Crusoe embrutecido, había comenzado a ir a la deriva por un mar de alcohol. Descuidó sus obligaciones como licenciado, su trabajo, sus estudios de posgrado. Lo abandonó todo sin pensar, y pasaba el día entero, e incluso hasta bastante tarde por la noche, sentado en la cocina de su departamento, a oscuras, escuchando música y bebiendo whisky.（日中ずっと，そして深夜までさえア

に遡る形とし，最後に誤訳の一般的傾向を抽出する。

2. 現代文学

現代の作家たちの，ことに現代を扱った作品は，日本語を母語としない人にとっても場面設定や登場人物の心理が理解しやすく，かつ，西洋語の構文や発想を念頭に置いて執筆されることも増えたため，あまり大きな誤訳はない[5)]。しかし細部においては，時に問題が見られる。

(1) 小川洋子『博士の愛した数式』

a. 何故かは知らないが雇い主にとって靴のサイズが意味深いものであるなら，もう少しそれを話題に登らせておくべきではと考え，私は質問した。（小川洋子『博士の愛した数式』，［2003］，2005，p. 13。下線は筆者。以下同じ）

b. No sé por qué se lo pregunté,（なぜ私は彼にそう訊いたのか分からないが）pero pensé que sería oportuno seguir hablando un poco más de aquello, ya que, al parecer, el número del calzado iba a ser algo importante para mi empleador.（Yoshiko Sugiyama *et al.* 訳，*La fórmula preferida del profesor*, 2008, p. 17. 問題箇所の和訳は筆者。以下同じ）

c. Se lo pregunté pensando que sería oportuno seguir hablando un poco más de aquello, ya que no sé por qué pero el número del calzado iba a ser algo importante para mi empleador.（雇い主にとって，なぜかは知らないが，靴のサイズが意味深いものであるなら，（…）。）（筆者案）

小川洋子の多くの作品がスペイン語に翻訳されている。この小説は，その他の諸言語にも訳されている[6)]。原文（1a）は 2008 年に出版されたスペイン語版では（1b）のように訳されているが，「何故かは知らないが」と，それが修飾する部分との関係が間違っている。本稿では（1c）を代案として提案する[7)]。

(2) 吉本ばなな『キッチン』

a. ベランダが見える大きな窓の前には，まるでジャングルのようにたくさんの植物群が鉢やらプランターやらに植わって並んでいて，家じゅうよく見ると

日本文学のスペイン語訳についての一試案[1)]

福　嶌　教　隆

1. はじめに

近年，日本文学は極めて盛んにスペイン語（イスパニア語）圏に紹介されている。2014 年だけでも，京極夏彦『姑獲鳥の夏』，東野圭吾『容疑者 X の献身』のような現代の推理小説の翻訳が出版される一方で，井原西鶴の『男色大鑑』や十返舎一九『東海道中膝栗毛』のような古典文学のスペイン語訳も上梓されるという活況ぶりである[2)]。しかし訳文を検討すると，時に誤訳が発見され，中には原文の理解を大きく損ねるものもある。筆者はかつて，以下のように述べ，さまざまな誤訳を指摘したことがあった（拙稿 2009：79）[3)]。

「これまでなされた翻訳の努力と成果は高く評価されるべきである。しかし、先人の業績を活用し，時にはその誤謬を正すことは，後に続く者の義務であろう。（…）スペイン語圏の読者の大半は，訳文と照らし合わせることがないであろう。また，日本語母語話者がスペイン語に訳された日本文学を読む機会も少ないであろう。こうして仮に重大な誤訳があっても看過され，誤った訳文が多年にわたって定着し，不正確な日本文学のイメージが海外で形成されてしまう危険がある。日本文学がスペイン語にどれだけ正しく訳されているかを調べるには，両言語を理解できなければならない。従ってわが国のスペイン語研究教育者は，機会あるごとにこの作業に携わり，翻訳の質を高めていくことが望ましい。」

本稿ではこれを発展させ，誤訳の例を追加して示すばかりでなく，それに代わる，より良いスペイン語訳を提案してみたい[4)]。提示の順序は現在から過去